

感謝の言葉

本日、午前中に感動の卒業式を終え、同窓生四千五百八十二名のハトの仲間入りをし、新たな旅立ちに胸を膨らませる中、ついに妹背牛商業高等学校との別れの時を迎えることとなりました。これから先、この学校に仲間や教職員の皆様と共に足を踏み入れる機会がなくなると思うと、今日が本当に大切な日であると改めて感じます。

私達がこの学校に入学したばかりの頃は、まだ学校の知識は浅く、知っていたことは、妹背牛という小さな町の小さな学校で、バレーボールが有名だということぐらいでした。これから始まる新たな学校生活に夢や希望を膨らませる中、閉校の事実を知ったのは入学してからわずか二ヶ月後のことでした。

「生徒募集停止」「私達が最後の卒業生」とあまりに急な出来事に、すぐに受け止めることは出来ませんでした。これからどうなってしまうのか、学校生活にも不安を抱き始めました。そのような中、町・同窓生・保護者の皆様を中心に、存続を求める署名活動を行ってくださり、十二万名もの署名を集めてくださいました。

また、平成十八年七月二十六日に行われました、存続を訴える町民集会での皆様のお言葉一つ一つが胸に響き、涙を浮かべたことを今でも覚えております。閉校は決定しましたが、全国の皆様に応援して頂いていることを実感し、私達は大変幸せであり、新たな一歩を踏み出す勇気を頂きました。

これほど応援をして頂けるのも、これまでの五九年間の伝統を築き上げてくださった同窓生の先輩のおかげだと感じています。先輩方が残してくださった輝かしい伝統に心から感謝をし、この学校がなくなる最後の日まで、その伝統を受け継いでいこうと決意しました。

私達は、学年が上がるにつれて、全校生徒の数は減っていきました。しかし、町の方々や保護者のご協力により夏の大きなイベントである学校祭は本日、外の校舎に掲げたモザイク画の作成するなど盛大に行うことが出来ました。また、総合学習の時間では地域の企業の皆様と協力し、商品の開発をしたり、田植えを自分達で行い、そのお米や商品の販売活動も積極的に行い妹背牛町をPRしました。また、妹背牛町の伝統芸能である妹背牛音頭を復活させ、敬老会で発表するなど、学校生活は活気あふれる活動をしてきました。

また、そのような中、閉校に携わる取り組みの一つとして、平成二十年十一月五日に桜の木の閉校植樹を行いました。その木はまだ小さ

いながらもしっかりと妹背牛の大地に根づいていました。例え学校が無く
なってしまうても、この学校に込められた様々な思いも全て桜の木が受け
継いでくれたと思います。卒業し、何年経とうとも、また仲間や教職
員とその桜の木の下に集い、思い出を語れる日が来ることを願い、心を
込めて植樹をしました。

さらに、学校の外観も生き生きとした芝生が広がり、また、私達が
毎日交代で水をあげた沢山の花々が華やかに飾られました。冬には公
務補の玉川さん、ボイラーの小酒井さん、福田さんが作ってくださった
数多くのアイスクャンドルが火を灯し、暗くなるとイルミネーションが明
るく輝くなど、私達の学校は決して閉校の寂しさを感じさせることはあ
りませんでした。

そして、私たちは今日の閉校式典を生涯忘れられない最高のものに
しようと二九名の生徒が心を一つにし、校長先生をはじめ先生方と協
力し、今日まで本当に一生懸命準備を行ってきました。それは、この
妹背高の大切な足跡と思い出を皆様、そして私達の胸に深く刻みたい
と思ったからです。

さらに、ただいま行いました生徒パフォーマンスでは皆様に感謝の気持
ちを伝えるため、何度も練習を積み重ね試行錯誤し創作しました。

私たちは、長年の支援をしてくださった妹背牛町の皆様、この学校
の素晴らしい伝統を築いてくださった多くの先輩方、いつも私たちのこと
を温かく見守ってくださった家族や親戚の方々と教職員の皆様、そして、
この妹背牛商業高校に関わり五九年応援してくださった全ての皆様に
お礼の言葉を伝えたいです。

皆様は、私達の大きな心の支えとなってくださいました。皆様のおか
げで私達二九名は決して寂しい思いをすることはありませんでした。

妹背牛商業高校に入学し卒業したことを生涯誇りに思っています。

妹背牛町をはじめ全道、全国の皆様に支えられ、私達は幸せでした。
青春の故郷、妹背牛町に閉校記念シンボル桜が開花し、お世話に
なりました町民の皆様が愛され、私たちが集いの場所となることを楽し
みにしています。

皆さん、本当にありがとうございました。

平成二十一年三月二日

北海道妹背牛商業高等学校

閉校式典生徒代表

鈴木 閑